

長期連載

第3回 「東京さ行ってスターになる」

これまで誰も
手掛けなかった
歌謡界の
大御所の足跡を
追うドキュメント！

芸道60周年記念

涙と汗とまつりと

——北島三郎物語

●ジャーナリスト 黒田伸

(文中写真も筆者)

中に運ぶと、イカたちは命の余韻を精一杯伝えるかのように輝いた。

「まるで夜光塗料を塗ったように一斉に光り出す夢のような光景は今もまぶたに焼き付いています」と、芸道50周年を記念した知内町のインタビューに答えている。

地元の知内中学で優秀な成績を収めていた穰が名門の函館西

高に進むことになり、父は船を売って3年間の学費と通学費用を工面する。入学後それを知った穰は片道1時間半かかる汽車の窓から函館湾をながめながら「父ちゃん、母ちゃん、苦勞をかけてごめん。ありがとう」と感謝したという。

両親は当然、函館か知内で働いてくれるものと思っていた。ところが高校3年になって進路

ばいいじゃないか」と、父は声を荒らげた。
しかし、穰の意志は固かった。「俺は歌手になって親孝行がしたいんだ」「この道しかねえんだ」と繰り返すうちに父がついに折れる。

「わかった。穰、東京さ行け。でもな、失敗して帰って来てもお前に分ける田んぼや畑は一つもねえからな」

もはやあきらめ切った表情で話す父・一郎の横で母・キクエは涙するばかりだった。

片道切符の連絡船

3月末の津軽海峡は、冬景色からようやく春の気配が漂い始めるころだ。18歳の穰は青函連絡船の初代「羊蹄丸」のデッキの手すりを握りながら遠ざかる函館湾を見つめていた。栈橋にはだんだんと小さくなる父がいた。母は知内町の家の前でちぎ

「この道しかないんだ」

のちの北島三郎となる大野穰が故郷をあとにしたのは、函館西高を卒業した1955（昭和30）年3月のことだ。その2年前に函館で開催された「NHKのど自慢」でアナウンサーの宮田輝に「良い声してますね」と言われたことがきっかけとなって歌手になる夢を見る。

当時、知内町で漁師をしていた父・一郎は長男の穰に家を継がせるつもりだった。子だくさんの家庭で食べるのも苦しい。網元と言ってもニシンが獲れなくなりわずかな貯えを切り崩しながら、子どもたちが収入を得るまで、と思つて穰の成長を待った。

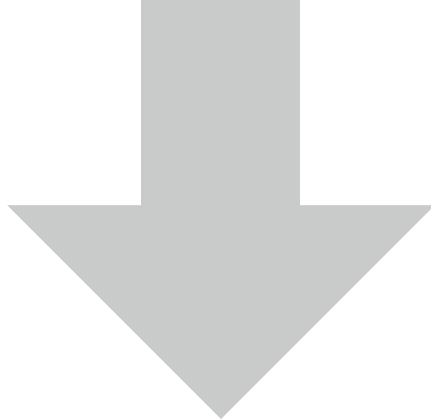
穰は漁師が嫌いだったわけではなく。父が獲つて来たイカを母が裂いて天日干しにするのを手伝った。夕方、それを納屋の



▲羊蹄丸の外観(左)と再現された羊蹄丸の乗船口(北島三郎記念館)

を決めるとき穰は「俺は歌手になりたい。東京さ、行ってスターになるんだ」と打ち明ける。

両親は大反対だった。「ばかなことを言うんでない。どうして一緒に働いてくれねえんだ。家族みんな支え合つていけ



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)